海神別荘

泉鏡花

時。

　現代。

場所。

　海底の琅玕殿。

人物。

　公子。　沖の僧都。（年老いたる海坊主）　美女。

　博士。

　女房。　侍女。（七人）　黒潮騎士。（多数）

森厳藍碧(しんげんらんぺき)なる琅玕殿裡(ろうかんでんり)。黒影(こくえい)あり。——沖の僧都(そうず)。

僧都　お腰元衆。

侍女一　（薄色の洋装したるが扉(ドア)より出(い)づ）はい、はい。これは御僧(おそう)。

僧都　や、目覚しく、美しい、異(かわ)った扮装(いでたち)でおいでなさる。

侍女一　御挨拶(ごあいさつ)でございます。美しいかどうかは存じませんけれど、異った支度には違いないのでございます。若様、かねてのお望みが叶(かな)いま

して、今夜お輿入(こしいれ)のございます。若奥様が、島田のお髪(ぐし)、お振袖と承りましたから、私(わたくし)どもは、余計そのお姿のお目立ち遊ばすように、皆して、かように申合せましたのでございます。

僧都　はあ、さてもお似合いなされたが、いずこの浦の風俗じゃろうな。

侍女一　度々海の上へお出でなさいますもの、よく御存じでおあんなさいましょうのに。

僧都　いや、荒海を切って影を顕(あらわ)すのは暴風雨(あらし)の折から。如法(にょほう)たいてい暗夜(やみ)じゃに因って、見えるのは墓の船に、死骸(しがい)の蠢(うごめ)く裸体(はだか)ばかり。色ある女性(にょしょう)の衣(きぬ)などは睫毛(まつげ)にも掛(かか)りませぬ。さりとも小僧のみぎりはの、蒼(あお)い炎の息を吹いても、素奴(しゃつ)色の白いはないか、袖の紅(あか)いはないか、と胴の間(ま)、狭間(はざま)、帆柱の根、錨綱(いかりづな)の下までも、あなぐり探いたものなれども、孫子(まごこ)は措(お)け、僧都においては、久しく心にも掛けませいで、一向に不案内じゃ。

侍女一　（笑う）お精進でおいで遊ばします。もし、これは、桜貝、蘇芳貝、いろいろの貝を蕊にして、花の波が白く咲きます、その渚を、青い山、緑の小松に包まれて、大陸の婦たちが、夏の頃、百合、桔梗、月見草、夕顔の雪の装などして、旭の光、月影に、遥に（高濶なる碧瑠璃の天井を、髪艶やかに打仰ぐ）姿を映します。ああ、風情な。美しいと視めましたものでございますから、私ども皆が、今夜はこの服装に揃えました。

僧都　一段とお見事じゃ。が、朝ほど御機嫌伺いに出ました節は、御殿（ごてん）、お腰元衆、いずれも不断の服装（なり）でおいでなされた。その節は、今宵、あの美女がこれへ輿入の儀はまだ極（きま）らなんだ。じたい人間は決断が遅いに困ってな。……それじゃに、かねてのお心掛（こころがけ）か。弥疾（いやと）く装（なり）が間に合うたもののう。

侍女一　まあ、貴老（あなた）は。私（わたくし）たちこの玉のような皆（みんな）の膚（はだ）は、白い尾花の穂を散らした、山々の秋の錦（にしき）が水に映ると同（おんな）じに、こうと思えば、つ

いそれなりに、思うまま、身の装の出来ます体でおりますものを。貴老はお忘れなさいましたか。

貴老は。……貴老だとて違いはしません。緋の法衣を召そうと思えば、お思いなさいます、と右左、峯に、一本燃立つような。

僧都　ま、ま、分った。（腰を屈めつつ、圧うるがごとく掌を挙げて制す）何とも相済まぬ儀じゃ。

海の住居（すまい）の難有（ありがた）さに馴（な）れて、蔭日向（かげひなた）、雲の往来（ゆきき）に、潮（うしお）の色の変ると同様。如意自在（にょいじざい）心のまま、たちどころに身の装（よそおい）の成る事を忘れていました。

なれども、僧都が身は、こうした墨染の暗夜（やみよ）こそ可けれ、なまじ緋の法衣（ころも）など絡（まと）おうなら、ずぶ濡（ぬれ）の提灯（ちょうちん）じゃ、戸惑（とまどい）をした鱏（えい）の魚（うお）じゃなどと申そう。圧（おし）も石も利く事ではない。（細く丈長き鉄（くろがね）の錨（いかり）を倒（さかしま）にして携えたる杖（つえ）を、軽（かろ）く突直す。）

いや、また忘れてはならぬ。忘れぬ前（さき）に申上げたい儀で罷出（まかりで）た。若様へお取次を頼みましょ。

侍女一　畏(かしこま)りました。唯今(ただいま)。……あの、ちょうど可(い)い折に存じます。

右の方闥(かたドア)を排して行(ゆ)く。

僧都　（謹みたる体(てい)にて室内を眴(みまわ)す。）はあ、争われぬ。法衣(ころも)の袖に春がそよぐ。

（錨の杖を抱（いだ）きて彳（たたず）む。）

公子　（衝（つ）と押す、闥（ドア）を排（ひら）きて、性急に登場す。面（おも）玉のごとく臈丈（ろうた）けたり。黒髪を背に捌（さば）く。青地錦の直垂（ひたたれ）、黄金（こがね）づくりの剣（つるぎ）を佩（は）く。上段、一階高き床の端に、端然として立つ。）

爺（じ）い、見えたか。

侍女五人、以前の一人を真先（まっさき）に、すらすらと従い出づ。いずれも洋装。第五の侍女、年最も少（わか）し。二人は床の上、公子（こうし）の背後（うしろ）に。二人は床を下りて僧都の前に。第一の侍女はその背（うしろ）に立つ。

僧都　は。（大床（おおゆか）に跪（ひざまず）く。控えたる侍女一、件（くだん）の錨の杖を預る）これはこれは、御休息の処を恐入りましてござります。

公子　（親しげに）爺い、用か。

僧都　紺青（こんじょう）、群青（ぐんじょう）、白群（びゃくぐん）、朱、碧（へき）の御蔵の中より、この度の儀に就きまして、先方へお遣わしになりました、品々の類（たぐい）と、数々を、念のために申上げとうございまして。

公子　（立ちたるまま）おお、あの女の父親に遣（や）った、陸で結納（ゆいのう）とか云うものの事か。

僧都　はあ、いや、御聡明なる若様。若様にはお覚違（おぼえちが）いでございます。彼等夥間（なかま）に結納と申す

は、親々が縁を結び、媒妁人（なこうど）の手をもち、婚約の祝儀、目録を贈りますでござります。しかるにこの度は、先方の父親が、若様の御支配遊ばす、わたつみの財宝に望（のぞみ）を掛け、もしこの念願の届くにおいては、眉目容色（みめきりょう）、世に類（たぐい）なき一人の娘を、海底へ捧げ奉る段、しかと誓いました。すなわち、彼が望みの宝をお遣（つかわ）しになりましたに因って、是非に及ばず、誓言（せいごん）の通り、娘を波に沈めましたのでござります。されば、お送り遊ばされた数の宝は、彼等が結納と申そうより、俗に女の身代（みのしろ）と云うものにござりますので。

公子　（軽く頷く）可、何にしろすこしばかりの事を、別に知らせるには及ばんのに。

僧都　いやいや、鱗一枚、一草の空貝とは申せ、僧都が承りました上は、活達なる若様、かような事はお気煩かしゅうおいでなさりましようなれども、老のしょうがに、お耳に入れねばなりませぬ。お腰元衆もお執成。（五人の侍女に目遣す）平にお聞取りを願わしゅう。

侍女三　若様、お座へ。

公子　（顧みて）椅子（いす）をこちらへ。

侍女三、四、両人して白き枝珊瑚（えださんご）の椅子を捧げ、床の端近（はしぢか）に据う。大隋円形（だえんけい）の白き琅玕（ろうかん）の、沈みたる光沢を帯べる卓子（テエブル）、上段の中央にあり。枝のままなる見事なる珊瑚の椅子、紅白二脚、紅（あか）きは花のごとく、白きは霞のごときを、相対して置く。侍女等が捧出（ささげい）でて位置を変えて据えたるは、その白き方（かた）一脚なり。

僧都　真鯛大小八千枚。鰤、鮪、ともに二万疋。鰹、真那鰹、各一万本。大比目魚五千枚。鱚、魴鮄、鯒、鰷身魚、目張魚、藻魚、合せて七百籠。若布のその幅六丈、長さ十五尋のもの、百枚一巻九千連。鮟鱇五十袋。虎河豚一頭。大の鮹一番。さて、別にまた、月の灘の桃色の枝珊瑚一株、丈八尺。（この分、手にて仕方す）周囲三抱の分にござりまして。ええ、月の真珠、花の真珠、雪の真珠、いずれも一寸の珠三十三粒、

八分の珠百五粒、紅宝玉三十顆(か)、大(おお)さ鶴の卵、粒を揃えて、これは碧瑪瑙(あおめのう)の盆に装(かざ)り、緑宝玉、三百顆、孔雀(くじゃく)の尾の渦巻の数に合せ、紫の瑠璃(るり)の台、五色に透いて輝きまする鰐(わに)の皮三十六枚、沙金(さきん)の包(つつみ)七十袋(たい)。量目(はかりめ)約百万両。閻浮檀金(えんぶだごん)十斤也。緞子(どんす)、縮緬(ちりめん)、綾(あや)、錦(にしき)、牡丹(ぼたん)、芍薬(しゃくやく)、菊の花、黄金色(こんじき)の菫(すみれ)、銀覆輪(ぎんぷくりん)の、月草、露草。

侍女一　もしもし、唯今(ただいま)のそれは、あの、残らず、そのお娘御(むすめご)の身の代(しろ)とかにお遣わしの分なのでございますか。

僧都　残らず身の代と？……はあ、いかさまな。
（心付く）不重宝（ぶちょうほう）。これはこれは海松（みる）ふさの袖に記して覚えのまま、潮（うしお）に乗って、颯（さつ）と読流しました。はて、何から申した事やら、品目の多い処へ、数々ゆえに。えええ、真鯛大小八千枚。

侍女一　鰤、鮪ともに二万疋。鰹、真那鰹、各（おのおの）一万本。

侍女二　（僧都の前にあり）大比目魚五千枚。鰭、魴鮄、鯒、あいなめ、目ばる、藻魚の類合せて七百籠。

侍女三　（公子の背後にあり）若布のその幅六丈、長さ十五尋のもの百枚一巻（ひとまき）九千連。

侍女四　（同じく公子の背後に）鮟鱇五十袋、虎河豚一頭、大の鮹一番（ひとつがい）。まあ……（笑う。侍女皆笑う。）

僧都　（額の汗を拭《ふ》く）それそれさよう、さよう。

公子　（微笑しつつ）笑うな、老人は真面目《まじめ》でいる。

侍女五　（最も少《わか》し。斉《ひと》しく公子の背後に附添う。派手に美《うるわ》しき声す）月の灘の桃色の枝珊瑚樹、対《つい》の一株、丈八尺、周囲《まわり》三抱《みかかえ》の分。一寸の玉三十三粒……雪の真珠、花の真珠。

侍女一　月の真珠。

僧都　しばらく。までじゃまでじゃ、までにござる。……桃色の枝珊瑚樹、丈八尺、周囲三抱の分までにござった。（公子に）鶴の卵ほどの紅宝玉、孔雀の渦巻の緑宝玉、青瑪瑙の盆、紫の瑠璃の台。この分は、天なる（仰いで礼拝す）月宮殿に貢（みつぎ）のものにござりました。

公子　私もそうらしく思って聞いた。僧都、それから後に言われた、その菫、露草などは、金銀宝玉の類は云うまでもない、魚類ほどにも、人

間が珍重しないものと聞く。が、同じく、あの方(かた)へ遣わしたものか。

僧都　綾、錦、牡丹、芍薬、縺(もつ)れも散りもいたしませぬを、老人の申条(もうしじょう)、はや、また海松(みる)のように乱れました。ええええ、その菫、露草は、若様、この度の御旅行につき、白雪(はくせつ)の竜馬(りゅうめ)にめされ、渚(なぎさ)を掛けて浦づたい、朝夕の、茜(あかね)、紫、雲の上を山の峰へお潜(しの)びにてお出ましの節、珍しくお手に入(い)りましたを、御姉君(おんあねぎみ)、乙姫(おとひめ)様へ御進物の分でござりました。

侍女一　姫様は、閻浮檀金（えんぶだごん）の一輪挿（いちりんざし）に、真珠の露でお活（い）け遊ばし、お手許（てもと）をお離しなさいませぬそうにございます。

公子　度々は手に入らない。私も大方、姉上に進（あ）げたその事であろうと思った。

僧都　御意。娘の親へ遣わしましたは、真鯛より数えまして、珊瑚一対……までに止（とど）まりました。

侍女二　海では何ほどの事でもございませんが、受取ります陸（おか）の人には、鯛も比目魚も千と万、少ない数ではございますまいに、僅（わずか）な日の間に、ようお手廻し、お遣わしになりましてございます。

僧都　さればその事。一国、一島、津や浦の果（はて）から果を一網（ひとあみ）にもせい、人間夥間（なかま）が、大海原（おおうなばら）から取入れます獲（え）ものというは、貝に溜（たま）った雫（しずく）ほどにいささかなものでござっての、お腰元衆など思うてもみられまい、鉤（はり）の尖（さき）に虫を附けて

雑魚(ざこ)一筋を釣るという仙人業(せんにんわざ)をしまするよ。この度の娘の父は、さまでにもなければども、小船一つで網を打つが、海月(くらげ)ほどにしょぼりと拡げて、泡にも足らぬ小魚を掬(しゃく)う。入(いれ)ものが小さき故に、それが希望(のぞみ)を満しますに、手間の入(い)ること、何ともまだるい。鰯(いわし)を育てて鯨にするより歯痒(はがゆ)い段の行止(ゆきどま)り。（公子に向う）若様は御性急じゃ。早く彼が願(ねがい)を満たいて、誓(ちかい)の美女を取れ、と御意ある。よって、黒潮、赤潮の御手兵をちとばかり動かしましたわ。赤潮の剣(つるぎ)は、炎の稲妻、黒潮の黒い旗は、黒雲の峰を

築いて、沖から撞と浴びせたほどに、一浦の津波となって、田畑も家も山へ流いた。片隅の美女の家へ、門背戸かけて、畳天井、一斉に、屋根の上の丘の腹まで運込みました儀でござったよ。

侍女三　まあ、お勇ましい。

公子　（少し俯向く）勇ましいではない。家畑を押流して、浦のもの等は迷惑をしはしないか。

僧都　いや、いや、黒潮と赤潮が、密(そ)と爪弾(つまはじ)きしましたばかり。人命を断つほどではございませなんだ。もっとも迷惑をせば、いたせ、娘の親が人間同士の間(なか)でさえ、自分ばかりは、思い懸けない海の幸を、黄金(こがね)の山ほど摑(つか)みましたに因って、他の人々の難渋ごときはいささか気にも留めませぬに、海のお世子(よとり)であらせられます若様。人間界の迷惑など、お心に掛けさせますには毛頭当りませぬ儀でございます。

公子　（頷(うなず)く）そんなら可(よし)――僧都。

僧都　はは。（更めて手を支く。）

公子　あれの親は、こちらから遣わした、娘の身の代とかいうものに満足をしたであろうか。

僧都　御意、満足いたしましたればこそ、当御殿、お求めに従い、美女を沈めました儀にござります。もっとも、真鯛、鰹、真那鰹、その金銀の魚類のみでは、満足をしませなんだが、続いて、三抱え一対の枝珊瑚を、夜の渚に差置きまする

と、山の端出づる月の光に、真紫に輝きまするを夢のように抱きました時、あれの父親は白砂に領伏し、波の裙を吸いました。あわれ竜神、一命も捧げ奉ると、御恩のほどを難有がりましたのでござります。

公子　（微笑す）親仁の命などは御免だな。そんな魂を引取ると、海月が殖えて、迷惑をするよ。

侍女五　あんな事をおっしゃいます。

一同笑う。

公子　けれども僧都、そんな事で満足した、人間の慾(よく)は浅いものだね。

僧都　まだまだ、あれは深い方でございます。一人娘の身に代えて、海の宝を望みましたは、慾念の逞(たくまし)い故でございまして。……たかだかは人間同士、夥間(なかま)うちで、白い柔(やわらか)な膩身(あぶらみ)を、炎の燃立つ絹に包んで蒸しながら売り渡すのが、

峠の関所かと心得ます。

公子　馬鹿だな。（珊瑚の椅子をすツと立つ）恋しい女よ。望めば生命（いのち）でも遣（や）ろうものを。……ははは、ははは。

微笑す。

侍女四　お思われ遊ばした娘御は、天地（あめつち）かけて、波かけて、お仕合せでおいで遊ばします。

侍女一　早くお着き遊(あそば)せば可(よ)うございます。
私(わたくし)どももお待遠(まちどお)に存じ上げます。

公子　道中の様子を見よう、旅の様子を見よう。
(闥(ドア)の外に向って呼ぶ) おいおい、居間の鏡を寄越(よこ)せ。(闥開く。侍女六、七、二人、赤地の錦の蔽(おおい)を掛けたる大なる姿見を捧げ出づ。)

僧都も御覧。

僧都　失礼ながら。（膝行（しっこう）して進む。侍女等、姿見を卓子（テエブル）の上に据え、錦の蔽を展（ひら）く。侍女等、卓子の端の一方に集る。）

公子　（姿見の面（おも）を指（ゆびさ）し、僧都を見返る）あれだ、あれだ。あの一点の光がそれだ。お前たちも見ないか。

舞台転ず。しばし暗黒、寂寞（せきばく）として波濤（はとう）の音聞ゆ。やがて一個（ひとつ）、花白く葉の青き蓮華燈籠（れんげどうろう）、漂々として波に漾（ただよ）えるがごとく顕（あらわ）る。続いて花の赤

き同じ燈籠、中空のごとき高処に出づ。また出づ、やや低し。なお見ゆ、少しく高し。その数五個になる時、累々たる波の舞台を露す。美女。毛巻島田に結う。白の振袖、綾の帯、紅の長襦袢、胸に水晶の数珠をかけ、襟に両袖を占めて、波の上に、雪のごとき竜馬に乗せらる。およそ手綱の丈を隔てて、一人下髪の女房。旅扮装。素足、小袿に褄端折りて、片手に市女笠を携え、片手に蓮華燈籠を提ぐ。第一点の燈の影はこれなり。黒潮騎士、美女の白竜馬をひしひしと囲んで両側二列を造る。およそ

十人。皆崑崙奴(くろんぼ)の形相。手に手に、すくすくと槍(やり)を立つ。穂先白く晃々(きらきら)として、氷柱(つらら)倒(さかしま)に黒髪を縫う。あるものは燈籠を槍に結ぶ、灯(ともしび)の高きはこれなり。あるものは手にし、あるものは腰にす。

女房　貴女(あなた)、お草臥(くたびれ)でございましょう。一息、お休息(やすみ)なさいますか。

美女　（夢見るようにその瞳を睜(みひら)く）ああ、（歎

息す）もし、誰方（どなた）ですか。……私の身体（からだ）は足を空に、（馬の背に裳（もすそ）を搔緊（かいし）む）倒（さかさま）に落ちて落ちて、波に沈んでいるのでしょうか。

女房　いいえ、お美しいお髪（ぐし）一筋、風にも波にもお縺（もつ）れはなさいません。何でお身体（からだ）が倒などと、そんな事がございましょう。

美女　いつか、いつですか、昨夜（ゆうべ）か、今夜か、前（さき）の世ですか。私が一人、楫（かじ）も櫓（ろ）もない、舟に、筵（むしろ）に乗せられて、波に流されました時、父親の

約束で、海の中へ捕られて行く、私へ供養のためだと云って、船の左右へ、前後に、波のまにまに散って浮く……蓮華燈籠が流れました。

女房　水に目のお馴れなさいません、貴女には道しるべ、また土産にもと存じまして、これが、（手に翳す）その燈籠でございます。

美女　まあ、灯も消えずに……

女房　燃えた火の消えますのは、油の尽きる、風

の吹く、陸(おか)ばかりの事でございます。一度、この国へ受取りますと、ここには風が吹きません。ただ花の香の、ほんのりと通うばかりでございます。紙の細工も珠(たま)に替って、葉の青いのは、翡翠(ひすい)の琅玕(ろうかん)、花片(はなびら)の紅白は、真玉(まだま)、白珠(しらたま)、紅宝玉。燃ゆる灯(ひ)も、またたきながら消えない星でございます。御覧遊ばせ、貴女。お召ものが濡れましたか。お髪(ぐし)も乱れはしますまい。何で、お身体(からだ)が倒(さかさま)でございましょう。

美女　最後に一目(ひとめ)、故郷(ふるさと)の浦の近い峰に、月を見

たと思いました。それぎり、底へ引くように船が沈んで、私は波に落ちたのです。ただ幻に、その燈籠の様な蒼（あお）い影を見て、胸を離れて遠くへ行（ゆ）く、自分の身の魂か、導く鬼火かと思いましたが、ふと見ますと、前途（ゆくて）にも、あれあれ、遥（はるか）の下と思う処に、月が一輪、おなじ光で見えますもの。

女房　ああ、（望む）あの光は。いえ。月影ではございません。

美女　でも、貴方（あなた）、雲が見えます、雪のような、空が見えます、瑠璃色（るりいろ）の。そして、真白（まっしろ）な絹糸のような光が射（さ）します。

女房　その雲は波、空は水。一輪の月と見えますのは、これから貴女がお出（いで）遊ばす、海の御殿でございます。あれへ、お迎え申すのです。

美女　そして。参って、私の身体（からだ）は、どうなるのでございましょうねえ。

女房　ほほほ、（笑う）何事も申しますまい。ただお嬉しい事なのです。おめでとう存じます。

美女　あの、捨小舟に流されて、海の贄に取られて行く、あの、（眴す）これが、嬉しい事なのでしょうか。めでたい事なのでしょうかねえ。

女房　（再び笑う）お国ではいかがでございましょうか。私たちが故郷では、もうこの上ない嬉しい、めでたい事なのでございますもの。

美女　あすこまで、道程(みちのり)は？

女房　お国でたとえは煩(むず)かしい。……おお、五十三次と承ります、東海道を十度(とたび)ずつ、三百度、往還(ゆきかえ)りを繰返して、三千度いたしますほどでございましょう。

美女　ええ、そんなに。

女房　めした竜馬は風よりも早し、お道筋は黄金(こがね)の欄干、白銀の波のお廊下、ただ花の香りの中

を、やがてお着きなさいます。

美女　潮風、磯の香、海松、海藻の、咽喉を刺す硫黄の臭気と思いのほか、ほんに、清しい、佳い薫、（柔に袖を動かす）……ですが、時々、悚然する、腥い香のしますのは？……

女房　人間の魂が、貴女を慕うのでございます。海月が寄るのでございます。

美女　人の魂が、海月と云って？

女房　海に参ります醜い人間の魂は、皆(みんな)、海月になって、ふわふわさまようて歩行(ある)きますのでございます。

黒潮騎士　（口々に）――煩(うるさ)い。しっしっ。――

（と、ものなき竜馬の周囲を呵(か)す。）

美女　まあ、情(なさけ)ない、お恥(はずか)しい。（袖をもって面(おもて)を蔽(おお)う。）

女房　いえ、貴女は、あの御殿の若様の、新夫人（にいおくさま）でいらっしゃいます、もはや人間ではありません。

美女　ええ。（袖を落す。——舞台転ず。真暗（まっくら）になる。）——

女房　（声のみして）急ぎましょう。美しい方を見ると、黒鰐（くろわに）、赤鮫（あかざめ）が襲います。騎馬が前後を守護しました。お憂慮（きづかい）はありませんが、いぎ参ると、斬合（きりあ）い攻合（せめあ）う、修羅の巷（ちまた）をお目に懸けね

ばなりません。――騎馬の方々、急いで下さい。

燈籠一つ行き、続いて一つ行く。漂蕩する趣して、高く低く奥の方深く行く。

舞台燦然として明るし、前の琅玕殿顕る。

公子、椅子の位置を卓子に正しく直して掛けて、姿見の傍にあり。向って右の上座。左の方に

赤き枝珊瑚の椅子、人なくしてただ据えらる。

その椅子を斜に下りて、沖の僧都、この度は腰掛けてあり。黒き珊瑚、小形なる椅子を用いる。

おなじ小形の椅子に、向って正面に一人、ほぼ

唐代の儒の服装したる、髯（ひげ）黒き一人（にん）あり。博士（はかせ）なり。

侍女七人、花のごとくその間を装い立つ。

公子　博士、お呼立（よびたて）をしました。

博士　（敬礼す。）

公子　これを御覧なさい。（姿見の面（おもて）を示す。）

千仞(せんじん)の崕(がけ)を累(かさ)ねた、漆のような波の間を、幽(かすか)に蒼(あお)い灯(ともしび)に照らされて、白馬の背に手綱(たづな)したは、この度迎え取るおもいものなんです。陸に獅子(しし)、虎の狙うと同一(おなじ)に、入道鰐(にゅうどうわに)、坊主鮫(ぼうずざめ)の一類が、美女と見れば、途中に襲撃(おそいう)って、黒髪を吸い、白き乳を裂き、美しい血を呑(の)もうとするから、守備のために旅行さきで、手にあり合せただけ、少数の黒潮騎士を附添わせた。渠等(かれら)は白刃(しらは)を揃えている。

博士　至極(しごく)のお計(はから)いに心得まするが。

公子　ところが、敵に備うるここの守備を出払わしたから不用心じゃ、危険であろう、と僧都が言われる。……それは恐れん、私が居れば仔細ない。けれども、また、僧都の言われるには、白衣に緋の襲した女子を馬に乗せて、黒髪を槍尖で縫ったのは、かの国で引廻しとか称えた罪人の姿に似ている、私の手許に迎入るるものを、不祥じゃ、忌わしいと言うのです。

事実不祥なれば、途中の保護は他にいくらも手

段があります。それは構わないが、私はいささかも不祥と思わん、忌わしいと思わない。

これを見ないか。私の領分に入った女の顔は、白い玉が月の光に包まれたと同一（おなじ）に、いよいよ清い。眉は美しく、瞳は澄み、唇の紅は冴（さ）えて、いささかも窶（やつ）れない。憂えておらん。清らかな衣（きもの）を着、新（あらた）に梳（くしけず）って、花に露の点滴（したた）る装（よそおい）して、馬に騎した姿は、かの国の花野の丈（たけ）を、錦の山の懐に抽（ぬ）く……歩行（あるく）より、車より、駕籠（かご）に乗ったより、一層鮮麗（あざやか）なものだと思う。その

上、選抜した慓悍な黒潮騎士の精鋭等に、長槍をもって四辺を払わせて通るのです。得意思うべしではないのですか。

僧都　（頻に頭を傾く。）

公子　引廻しと聞けば、恥を見せるのでしょう、苦痛を与えるのであろう。槍で囲み、旗を立て、淡く清く装った得意の人を馬に乗せて市を練って、やがて刑場に送って殺した処で、——殺されるものは平凡に疾病で死するより愉快でしょ

う。――それが何の刑罰になるのですか。陸と海と、国が違い、人情が違っても、まさか、そんな刑罰はあるまいと想う。僧都は、うろ覚えながら確に記憶に残ると言われる。……貴下をお呼立した次第です。ちょっとお験べを願いましょうか。

博士　仰聞けの記憶は私にもありますで。しかし、念のために験べまするで。ええ、陸上一切の刑法の記録でありましょうか、それとも。

公子　面倒です、あとはどうでも可い。ただ女子を馬に乗せ、槍を立てて引廻したという、そんな事があったかという、それだけです。

博士　正史でなく、小説、浄瑠璃の中を見ましょうで。時の人情と風俗とは、史書よりもむしろこの方が適当でありますので。（金光燦爛たる洋綴の書を展く。）

公子　（卓子に腰を掛く）たいそう気の利いた書物ですね。

博士　これは、仏国の大帝奈翁（ナポレオン）が、西暦千八百八年、西班牙（スペイン）遠征の途に上りました時、かねて世界有数の読書家。必要によって当時の図書館長バルビールに命じて製（つく）らせました、函入（はこいり）新装の、一千巻、一架（ひとたな）の内容は、宗教四十巻、叙事詩四十巻、戯曲四十巻、その他の詩篇六十巻。歴史六十巻、小説百巻、と申しまするデュオデシモ形（がた）と申す有名な版本の事を……お聞及びなさいまして、御姉君（おあねぎみ）、乙姫様が御工夫を遊ばしました。蓮（はす）の糸、一筋を、およそ枚数千頁に薄く織

拡げて、一万枚が一折（ひとおり）、一百二十折を合せて一冊に綴（と）じましたものでありまして、この国の微妙なる光に展（ひら）きますると、森羅万象（しんらばんしょう）、人類をはじめ、動植物、鉱物、一切の元素が、一々（ひとつ）ずつ微細なる活字となって、しかも、各々（おのおの）五色の輝（かがやき）を放ち、名詞、代名詞、動詞、助動詞、主客、句読（くとう）、いずれも個々別々、七彩に照って、かく開きました真白（まっしろ）な枚（ペエジ）の上へ、自然と、染め出さるるのでありまして。

公子　姉上（あねうえ）が、それを。——さぞ、御秘蔵のもの

でしょう。

博士　御秘蔵ながら、若様の御書物蔵へも、整然(ちゃん)と姫様がお備えつけでありますので。

公子　では、私の所有ですか。

博士　若様はこの冊子と同じものを、瑪瑙(めのう)に青貝の蒔絵(まきえ)の書棚、五百架(たな)、御所有でいらせられまする次第であります。

公子　姉があって幸福（しあわせ）です。どれ、（取って披（ひら）く）これは……ただ白紙だね。

博士　は、恐れながら、それぞれの予備の知識がありませんでは、自然のその色彩ある活字は、ペエジの上には写り兼ねるのでございます。

公子　恥入るね。

博士　いやいや、若様は御勇武でいらせられます。入道鰐（にゅうどうわに）、黒鮫（くろざめ）の襲いまする節は、御訓練の黒潮、

赤潮騎士、御手の剣（つるぎ）でのうては御退けになりまする次第には参らぬのでありまして。けれども、姉姫様の御心づくし、節々は御閲読（ごえつどく）の儀をお勧め申ますするので。

僧都　もろともに、お勧め申上げますでござります。

公子　（頷（うなず）く）まあ、今の引廻しの事を見て下さい。

博士　確(たしか)に。（書を抜く）手近に浄瑠璃にありました。ああ、これにあります。……若様、これは大日本浪華(なにわ)の町人、大経師以春(だいきょうじいしゅん)の年若き女房、名だたる美女のおさん。手代(てだい)茂右衛門(もえもん)と不義顕(あらわ)れ、すなわち引廻し磔(はりつけ)になりまする処を、記したのでありまして。

公子　お読み。

博士　（朗読す）——紅蓮(ぐれん)の井戸堀、焦熱(しょうねつ)の、地獄のかま塗(ぬり)よしなやと、急がぬ道をいつのまに、

越ゆる我身の死出の山、死出の田長(たおさ)の田がりよし、野辺(のべ)より先を見渡せば、過ぎし冬至(とうじ)の冬枯の、木の間(こま)木の間にちらちらと、ぬき身の槍(やり)の恐しや、——

公子　(姿見を覗(のぞ)きつつ、且つ聴きつつ)ああ、いくらか似ている。

博士　——また冷返る(ひえかえる)夕嵐、雪の松原、この世から、かかる苦患(くげん)におう亡日(もうにち)、島田乱れてはらはらはら、顔にはいつもはんげしよう、縛られし

手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞ指の爪
とりよし、袖に氷を結びけり。……

侍女等、傾聴す。

公子　ただ、いい姿です、美しい形です。世間は
それでその女の罪を責めたと思うのだろうか。

博士　まず、卜見えまするので。

僧都　さようでございます。

公子　馬に騎(の)った女は、殺されても恋が叶(かな)い、思いが届いて、さぞ本望であろうがね。

僧都　――袖に氷を結びけり。涙などと、歎き悲しんだようにござります。

公子　それは、その引廻しを見る、見物の心ではないのか。私には分らん。（頭(かぶり)を掉(ふ)る。）博士――まだ他に例があるのですか。

博士　（朗読す）……世の哀とぞなりにける。今日は神田のくずれ橋に恥をさらし、または四谷、芝、浅草、日本橋に人こぞりて、見るに惜まぬはなし。これを思うに、かりにも人は悪き事をせまじきものなり。天これを許したまわぬなり。……

公子　（眉を顰む。――侍女等斉しく不審の面色す。）

博士　……この女思込みし事なれば、身の窶(やつ)るる事なくて、毎日ありし昔のごとく、黒髪を結わせて美(うる)わしき風情。……

公子　（色解く。侍女等、眉をひらく。）

博士　中略をいたします。……聞く人一しおいたわしく、その姿を見おくりけるに、限(かぎり)ある命のうち、入相(いりあい)の鐘つくころ、品(しな)かわりたる道芝の辺(ほとり)にして、その身は憂き煙となりぬ。人皆いずれの道にも煙はのがれず、殊に不便はこれに

ぞありける。――これで、鈴ケ森で火刑に処せられますするまでを、確か江戸中棄札に槍を立てて引廻した筈と心得ますするので。

公子　分りました。それはお七という娘でしょう。私は大すきな女なんです。御覧なさい。どこに当人が歎き悲みなぞしたのですか。人に惜まれ可哀がられて、女それ自身は大満足で、自若として火に焼かれた。得意想うべしではないのですか。なぜそれが刑罰なんだね。もし刑罰とすれば、恵の杖、情の鞭だ。実際その罪を罰

しようとするには、そのまま無事に置いて、平凡に愚図愚図(ぐずぐず)に生存(いきなが)らえさせて、皺(しわ)だらけの婆(ばば)にして、その娘を終らせるが可(い)いと、私は思う。……分けて、現在、殊にそのお七のごときは、姉上が海へお引取りになった。刑場の鈴ヶ森は自然海に近かった。姉上は御覧になった。鉄の鎖は手足を繋(つな)いだ、燃草(もえぐさ)は夕霜を置残してその肩を包んだ。煙は雪の振袖をふすべた。炎は緋鹿子(ひがのこ)を燃え抜いた。緋の牡丹(ぼたん)が崩れるより、虹(にじ)が燃えるより美しかった。恋の火の白熱は、凝(こ)って白玉(はくぎょく)となる、その膚(はだえ)を、氷った雛芥子(ひなげし)

の花に包んだ。姉の手の甘露が沖を曇らして注いだのだった。そのまま海の底へお引取りになって、現に、姉上の宮殿に、今も十七で、紅(くれない)の珊瑚の中に、結綿(ゆいわた)の花を咲かせているのではないか。

男は死ななかった。存命(ながら)えて坊主になって老い朽ちた。娘のために、姉上はそれさえお引取りになった。けれども、その魂は、途中で牡(おす)の海月(くらげ)になった。——時々未練に娘を覗(のぞ)いて、赤潮に追払われて、醜く、ふらふらと生白(なまじろ)く漾(ただよ)う

て失（う）する。あわれなものだ。

娘は幸福（しあわせ）ではないのですか。火も水も、火は虹となり、水は滝となって、彼の生命を飾ったのです。抜身（ぬきみ）の槍の刑罰が馬の左右に、その誉（ほまれ）を輝かすと同一（おんなじ）に。——博士いかがですか、僧都。

博士　しかし、しかし若様、私（わたくし）は慎重にお答えをいたしまする。身はこの職にありながら、事実、人間界の心も情も、まだいささかも分らぬ

のでありまして。若様、唯今（ただいま）の仰（おお）せは、それは、すべて海の中にのみ留（とど）まりまするが。

公子　（穏和に頷（うなず）く）姉上も、以前お分りにならぬと言われた。その上、貴下（あなた）がお分りにならなければこれは誰にも分らないのです。私にも分らない。しかし事情も違う。彼を迎える、道中のこの（また姿見を指（ゆびさ）す）馬上の姿は、別に不祥ではあるまいと思う。

僧都　唯今、仰（おお）せ聞けられ承りまする内に、条理（すじみち）

は弁(わきま)えず、僧都にも分らぬことのみではござりますが、ただ、黒潮の抜身(ぬきみ)で囲みました段は、別に忌わしい事ではございませんように、老人にも、その合点参りましてございます。

公子　可(よし)、しかし僧都、ここに蓮華燈籠の意味も分った。が、一つ見馴(みな)れないものが見えるぞ。女が、黒髪と、あの雪の襟との間に——胸に珠を掛けた、あれは何かね。

僧都　はあ。（卓子(テエブル)に伸上る）はは、いかさま、い

や、若様。あれは水晶の数珠（じゅず）にございます。海に沈みまする覚悟につき、冥土（めいど）に参る心得のため、檀那寺（だんなでら）の和尚（おしょう）が授けましたのでござります。

公子　冥土とは？……それこそ不埒（ふらち）だ。そして仇光（あだびか）りがする、あれは……水晶か。

博士　水晶とは申す条、近頃は専ら硝子（ビイドロ）を用いますので。

公子　（一笑す）私の恋人ともあろうものが、無

ければ可（い）い。が、硝子（ビイドロ）とは何事ですか。金剛石、また真珠の揃うたのが可い。……博士、贈ってしかるべき頸飾（えりかざり）をお検（しら）べ下さい。

博士　畏（かしこま）りました。

公子　そして指環（ゆびわ）の珠の色も怪しい、お前たちどう見たか。

侍女一　近頃は、かんてらの灯の露店（ほしみせ）に、紅宝玉（ルビイ）、緑宝玉（エメラルド）と申して、貝を鬻（ひさ）ぐと承ります。

公子　お前たちの化粧の泡が、波に流れて渚（なぎさ）に散った、あの貝が宝石か。

侍女二　錦襴（きんらん）の服を着けて、青い頭巾（ずきん）を被（かぶ）りました、立派な玉商人（たまあきんど）の売りますものも、擬（にせ）が多いそうにございます。

公子　博士、ついでに指環を贈ろう。僧都、すぐに出向うて、遠路であるが、途中、早速、硝子（ビイドロ）とその擬（まが）い珠（たま）を取棄てさして下さい。お老寄（としより）に、

御苦労ながら。

僧都　（苦笑す）若様には、新夫人の、まだ、海にお馴れなさらず、御到着の遅いばかり気になされて、老人が、ここに形を消せば、瞬く間ものう、お姿見の中の御馬の前に映りまする神通を、お忘れなされて、老寄に苦労などと、心外な御意を蒙りまするわ。

公子　ははは、（無邪気に笑う）失礼をしました。

博士、僧都、一揖(いちゆう)して廻廊より退場す。侍女等慇懃(いんぎん)に見送る。

少し窮屈であったげな。

侍女等親しげに皆その前後に斉眉(かしず)き寄る。

性急な私だ。——女を待つ間(ま)の心遣(こころやり)にしたい。誰

か、あの国の歌を知っておらんか。

侍女三　存じております。浪花津（なにわづ）に咲くやこの花冬籠（ふゆごもり）、今を春へと咲くやこの花。

侍女四　若様、私（わたくし）も存じております。浅香山を。

公子　いや、そんなのではない。（博士がおきたる書を披（ひら）きつつ）女の国の東海道、道中の唄だ。何とか云うのだった。この書はいくらか覚えがない

と、文字が見えないのだそうだ。（呟く）姉上は貴重な、しかし、少しあてっこすりの書をお拵えになったよ。ああ、何とか云った、東海道の。

侍女五　五十三次のでございましょう、私が少し存じております。

公子　歌うてみないか。

侍女五　はい。（朗かに優しくあわれに唄う。）

都路は五十路(いそじ)あまりの三つの宿、……

公子　おお、それだ、字書のように、江戸紫で、都路と標目(みだし)が出た。（展(ひら)く）あとを。

侍女五　……時得て咲くや江戸の花、浪静(しずか)なる品川や、やがて越来(こえく)る川崎の、軒端(のきば)ならぶる神奈川は、早や程ヶ谷に程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ。紫匂(にお)う藤沢の、野面(のおも)に続く平塚も、もとのあわれは大磯(おおいそ)か。

蛙(かわず)鳴くなる小田原は。……（極悪(きまりわる)げに）
……もうあとは忘れました。

公子　可(よし)、ここに緑の活字が、白い雲の枚(ペエジ)に出た。――箱根を越えて伊豆の海、三島の里の神垣や――さあ、忘れた所は教えてやろう。この歌で、五十三次の宿を覚えて、お前たち、あの道中双六(どうちゅうすごろく)というものを遊んでみないか。上(あが)りは京都だ。姉の御殿に近い。誰か一人上って、双六の済む時分、ちょうど、この女は（姿見を見つつ）着く

であろう。一番上りのものには、瑪瑙の莢に、紅宝玉の実を装った、あの造りものの吉祥果を遣る。絵は直ぐに間に合ぬ。この室を五十三に割って双六の目に合せて、一人ずつ身体を進めるが可かろう。……賽が要る、持って来い。

（侍女六七、うつむいてともに微笑す）――どうした。

侍女六　姿見をお取寄せ遊ばしました時。

侍女七　二人して盤の双六をしておりましたので、賽は持っておりますのでございます。

公子　おもしろい。向うの廻廊の端へ集まれ。そして順になって始めるが可い。

侍女七　床へ振りましょうでございますか。

公子　心あって招かないのに来た、賽にも魂がある、

寄越せ。（受取る）卓子の上へ私が投げよう。お前たち一から七まで、目に従うて順に動くが可い。さあ、集れ。

（侍女七人、いそいそと、続いて廻廊のはずれに集り、貴女は一。私は二。こう口々に楽しげに取定め、勇みて賽を待つ。）

可いか、（片手に書を持ち、片手に賽を投ぐ）――一は三、かな川へ。（侍女一人進む）二は一、品川まで。（侍女一人また進む）三は五だ、戸塚へ行け。（かくして順々に繰返し次第に進む。第五の侍女、

年最も少きが一人衆を離れて賽の目に乗り、正面突当りなる窓際に進み、他と、間隔る。公子。これより前、姿見を見詰めて、賽の目と宿の数を算え淀む。……この時、うかとしたる体に書を落す。）

まだ、誰も上らないか。

侍女一　やっと一人天竜川まで参りました。

公子　ああ、まだるっこい。賽を二つ一所に振ろう

か。（手にしながら姿見に見入る。侍女等、等(ひとし)く其方(そなた)を凝視す。）

侍女五　きやっ。（叫ぶ。隙(ひま)なし。その姿、窓の外へ裳(もすそ)を引いて颯(さつ)と消ゆ）ああれえ。

侍女等、口々に、あれ、あれ、鮫(さめ)が、鮫が、入道鮫が、と立乱れ騒ぎ狂う。

公子　入道鮫が、何、（窓に衝(つ)と寄る。）

侍女一　ああ、黒鮫が三百ばかり。

侍女二　取巻いて、群りかかって。

侍女三　あれ、入道が口に銜（くわ）えた。

公子　外道（げどう）、外道、その女を返せ、外道。（叱咤（しった）しつつ、窓より出でんとす。）

侍女等縋（すが）り留（とど）む。

侍女四　軽々しい、若様。

公子　放せ。あれ見い。外道の口の間から、女の髪が溢(こぼ)れて落ちる。やあ、胸へ、乳へ、牙(きば)が喰入る。ええ、油断した。……骨も筋も断(き)れような。ああ、手を悶(もだ)える、裳(もすそ)を煽(あお)る。

侍女六　いいえ、若様、私たち御殿の女は、身(からだ)は綿よりも柔かです。

侍女七　蓮(はす)の糸を束(つか)ねましたようですから、鰐(わに)の牙が、脊筋と鳩尾(みずおち)へ噛合(かみあ)いましても、薄紙一重(ひとえ)透きます内は、血にも肉にも障りません。

侍女三　入道も、一類も、色を漁(あさ)るのでございます。生命(いのち)はしばらく助りましょう。

侍女四　その中(うち)に、その中に。まあ、お静まり遊ばして。

公子　いや、俺の力は弱いもののためだ。生命に掛けて取返す。——鎧を寄越せ。

侍女二人衝と出で、引返して、二人して、一領の鎧を捧げ、背後より颯と肩に投掛く。

公子、上へ引いて、頸よりつらなりたる兜を頂く。角ある毒竜、凄じき頭となる。その頭を頂く時に、侍女等、鎧の裾を捌く。外套のごとく背より垂れて、紫の鱗、金色の斑点連り輝く。

公子、また袖を取って肩よりして自ら喉に結ぶ、この結びめ、左右一双の毒竜の爪なり。迅速に

一縮す。立直るや否や、剣（つるぎ）を抜いて、頭上に翳（かざ）し、ハタと窓外を睨（にら）む。

侍女六人、斉（ひと）しくその左右に折敷き、手に手に匕首（あいくち）を抜連れて晃々（きらきら）と敵に構う。

外道、退（ひ）くな。（凝（じっ）と視（み）て、剣の刃を下に引く）虜（とりこ）を離した。受取れ。

侍女一　鎧をめしたばっかりで、御威徳を恐れて引

きました。

侍女二　長う太く、数百の鮫のかさなって、蜈蚣のように見えたのが、ああ、ちりぢりに、ちりぢりに。

侍女三　めだかのように遁げて行きます。

公子　おお、ちょうど黒潮等が帰って来た、帰った。

侍女四　ほんに、おつかい帰りの姉さんが、とりこ

を抱取って下すった。

公子　介抱してやれ。お前たちは出迎え。

侍女三人ずつ、一方は闔（とびら）のうちへ。一方は廻廊に退場。

公子、真中（まんなか）に、すっくと立ち、静かに剣（つるぎ）を納めて、右手（めて）なる白珊瑚（しろさんご）の椅子に凭（よ）る。騎士五人廻廊まで登場。

騎士一同　（槍を伏せて、踞り、同音に呼ぶ）若様。

公子　おお、帰ったか。

騎士一　もっての外な、今ほどは。

公子　何でもない、私は無事だ、皆御苦労だったな。

騎士一同　はッ。

公子　途中まで出向ったろう、僧都はどうしたか。

騎士一　あとの我ら夥間（なかま）を率いて、入道鮫を追掛けて参りました。

公子　よい相手だ、戦闘は観（み）ものであろう。――皆は休むが可（い）い。

騎士　槍は鞘（さや）に納めますまい、このまま御門を堅めまするわ。

公子　さまでにせずとも大事ない、休め。

騎士等、礼拝して退場。侍女一、登場。

侍女一　御安心遊ばしまし、疵（きず）を受けましたほどでもございません。ただ、酷（ひど）く驚きまして。

公子　可愛相（かわいそう）に、よく介抱してやれ。

侍女一　二人が附添っております、（廻廊を見込む）ああ、もう御廊下まで。（公子のさしずにより、姿見に錦の蔽を掛け、闥に入る。）

美女。先達の女房に、片手、手を曳かれて登場。姿を粛に、深く差俯向き、面影やややつれたれども、さまで悪怯れざる態度、徐に廻廊を進みて、床を上段に昇る。昇る時も、裾捌き静なり。

侍女三人、燈籠二個ずつ二人、一つを一人、五個を提げて附添い出で、一人々々、廻廊の廂に架

け、そのまま引返す。燈籠を侍女等の差置き果つるまでに、女房は、美女をその上段、紅(あか)き枝珊瑚の椅子まで導く順にてありたし。女房、謹んで公子に礼して、美女に椅子を教う。

女房　お掛け遊ばしまし。

美女、据置かるる状(さま)に椅子に掛く。女房はその裳(もすそ)に跪居(ついい)る。

美女、うつむきたるまましばし、皆無言。やがて

顔を上げて、正しく公子と見向ふ。瞳を据えて瞬(まばた)きせず。――間(ま)。

公子　よく見えた。（無造作に、座を立って、卓子(テエブル)の周囲(まわり)に近づき、手を取らんと衝(つ)と腕(かいな)を伸ばす。美女、崩るるがごとくに椅子をはずれ、床に伏す。）

女房　どうなさいました、貴女(あなた)、どうなさいました。

美女　（声細く、されども判然）はい、……覚悟しては来ましたけれど、余りと言えば、可恐しゅうございますもの。

女房　（心付く）おお、若様。その鎧をお解き遊ばせ。お驚きなさいますのもごもっともでございます。

公子　解いても可い、（結び目に手を掛け、思慮す）が、解かんでも可かろう。……最初に見た目は

どこまでも附絡（つきまと）う。（美女に）貴女（あなた）、おい、貴女、これを恐れては不可（いか）ん、私はこれあるがために、強い。これあるがために力があり威がある。今も既にこれに因って、めしつかう女の、入道鮫に嚙（か）まれたのを助けたのです。

美女　（やや面（おもて）を上ぐ）お召使が鮫の口に、やっぱり、そんな可恐（おそろし）い処なんでございますか。

公子　はははは、（笑う）貴女、敵のない国が、世界のどこにあるんですか。仇（あだ）は至る処に満ちて

いる――ただ一人の娘を捧ぐ、……海の幸を賜われ――貴女の親は、既に貴女の仇なのではないか。ただその敵に勝てば可いのだ。私は、この強さ、力、威あるがために勝つ。閨にただ二人ある時でも私はこれを脱ぐまいと思う。私の心は貴女を愛して、私の鎧は、敵から、仇から、世界から貴女を守護する。弱いもののために強いんです。毒竜の鱗は絡い、爪は抱き、角は枕してもいささかも貴女の身は傷けない。ともにこの鎧に包まるる内は、貴女は海の女王なんだ。放縦に大胆に、不羈、専横に、心のままに

して差支えない。鱗に、爪に、角に、一糸掛けない白身（はくしん）を抱（いだ）かれ包まれて、渡津海（わたつみ）の広さを散歩しても、あえて世に憚（はばか）る事はない。誰の目にも触れない。人は指（ゆびさし）をせん。時として見るものは、沖のその影を、真珠の光と見る。指（ゆびさ）すものは、喜見城（きけんじょう）の幻（まぼろし）景に迷うのです。

女の身として、優しいもの、媚（こび）あるもの、従うものに慕われて、それが何の本懐です。私は鱗をもって、角をもって、爪をもって愛するんだ。

……鎧は脱ぐまい、と思う。（従容（しょうよう）として椅子

に戻る。）

美女　（起直り、会釈す）……父へ、海の幸をお授け下さいました、津波のお強さ、船を覆して、ここへ、遠い海の中をお連れなすった、お力。道すがらはまたお使者(つかい)で、金剛石のこの襟飾(えりかざり)、宝玉のこの指環、（嬉しげに見ゆ）貴方(あなた)の御威徳はよく分りましたのでございます。

公子　津波位(しき)、家来どもが些細(ささい)な事を。さあ、そこへお掛け。

女房、介抱して、美女、椅子に直る。

頸飾(くびかざり)なんぞ、珠なんぞ。貴女の腰掛けている、それは珊瑚だ。

美女　まあ、父に下さいました枝よりは、幾倍とも。

公子　あれは草です。較(くら)ぶればここのは大樹だ。椅

子の丈は陸(くが)の山よりも高い。そうしている貴女の姿は、夕日影の峰に、雪の消残ったようであろう。少しく離れた私の兜(かぶと)の竜頭(たつがしら)は、城の天守の棟に飾った黄金の鯱(しゃち)ほどに見えようと思う。

美女　あの、人の目に、それが、貴方？

公子　譬喩(たとえ)です、人間の目には何にも見えん。

美女　ああ、見えはいたしますまい。お恥かしい、人間の小さな心には、ここに、見ますれば私が裳(すそ)

を曳(ひ)きます床も、琅玕(ろうかん)の一枚石。こうした御殿のある事は、夢にも知らないのでございますもの、情(なさけ)のう存じます。

公子　いや、そんなに謙遜をするには当らん。陸(くが)には名山、佳水(かすい)がある。峻岳(しゅんがく)、大河がある。

美女　でも、こんな御殿はないのです。

公子　あるのを知らないのです。海底の琅玕の宮殿に、宝蔵の珠玉金銀が、虹(にじ)に透いて見えるのに、

更科の月、錦を染めた木曾の山々は劣りはしない。……峰には、その錦葉を織る竜田姫がおいでなんだ。人間は知らんのか、知っても知らないふりをするのだろう。知らない振をして見ないんだろう。——陸は尊い、景色は得難い。今も、道中双六をして遊ぶのに、五十三次の一枚絵さえ手許にはなかったのだ。絵も貴い。

美女　あんな事をおっしゃって、絵には活きたものは住んでおりませんではありませんか。

公子　いや、住居(すまい)をしている。色彩は皆活きて動く。けれども、人は知らないのだ。人は見ないのだ。見ても見ない振(ふり)をしているんだから、決して人間の凡(すべ)てを貴いとは言わない、美(うつくし)いとは言わない。ただ陸(くが)は貴い。けれども、我が海は、この水は、一畝(うね)りの波を起して、その陸を浸す事が出来るんだ。ただ貴く、美(うつくし)いものは亡(ほろ)びない。……中にも貴女は美しい。だから、陸の一浦(ひとうら)を亡(ほろ)ぼして、ここへ迎え取ったのです。亡ぼす力のあるものが、亡びないものを迎え入れて、且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜(よろこ)ばねば不可(いけな)い、嬉しがらな

ければならない、悲しんではなりません。

女房　貴女、おっしゃる通りでございます。途中でも私（わたくし）が、お喜ばしい、おめでたい儀と申しました。決してお歎（なげ）きなさいます事はありません。

美女　いいえ、歎きはいたしません。悲しみはいたしません。ただ歎きますもの、悲しみますものに、私の、この容子（ようす）を見せてやりたいと思うのです。

女房　人間の目には見えません。

美女　故郷（ふるさと）の人たちには。

公子　見えるものか。

美女　（やや意気ぐむ）あの、私の親には。

公子　貴女は見えると思うのか。

美女　こうして、活（い）きておりますもの。

公子　（屹とした音調）無論、活きている。しかし、船から沈む時、ここへ来るにどういう決心をしたのですか。

美女　それは死ぬ事と思いました。故郷の人も皆そう思って、分けて親は歎き悲しみました。

公子　貴女の親は悲しむ事は少しもなかろう。はじめからそのつもりで、約束の財を得た。しかも満足だと云った。その代りに娘を波に沈めるのに、少しも歎くことはないではないか。

美女　けれども、父娘（おやこ）の情愛でございます。

公子　勝手な情愛だね。人間の、そんな情愛は私には分らん。（頭（かぶり）を掉（ふ）る）が、まあ、情愛としておく、それで。

美女　父は涙にくれました。小船が波に放たれます時、渚（なぎさ）の砂に、父の倒伏（たおれふ）しました処は、あの、ちょうど夕月に紫の枝珊瑚を抱きました処なのです。そして、後（あと）の歎（なげき）は、前の喜びにくらべまして、幾

十層倍だったでございましょう。

公子　じゃ、その枝珊瑚を波に返して、約束を戻せば可(よ)かった。

美女　いいえ、ですが、もう、海の幸も、枝珊瑚も、金銀に代り、家蔵(いえくら)に代っていたのでございます。

公子　可(よし)、その金銀を散らし、施し、棄て、蔵を毀(こぼ)ち、家を焼いて、もとの破蓑(やれみの)一領、網一具の漁民となって、娘の命乞(いのちごい)をすれば可かった。

美女　それでも、約束の女を寄越せと、海坊主のような黒い人が、夜ごと夜ごと天井を覗き、屏風を見越し、壁襖に立って、責めわたり、催促をなさいます。今更、家蔵に替えましたッて、とそう思ったのでございます。

公子　貴女の父は、もとの貧民になり下るから娘を許して下さい、と、その海坊主に掛合ってみたのですか。みはしなかろう。そして、貴女を船に送出す時、磯に倒れて悲しもうが、新しい白壁、艶

ある甍（いらか）を、山際の月に照らさして、夥多（あまた）の奴婢（ぬひ）に取巻かせて、近頃呼入れた、若い妾（めかけ）に介抱されていたではないのか。なぜ、それが情愛なんです。

美女　はい。……（恥じて首低（うなだ）る。）

公子　貴女を責（せ）むるのではない。よしそれが人間の情愛なれば情愛で可（よ）い、私とは何の係わりもないから。ちっとも構わん。が、私の愛する、この宮殿にある貴女が、そんな故郷（ふるさと）を思うて、歎いては不可（いか）ん。悲しんでは不可んと云うのです。

美女　貴方。（向直る。声に力を帯ぶ）私は始めから、決して歎いてはいないのです。父は悲しみました。浦人（うらびと）は可哀（あわれ）がりました。ですが私は――約束に応じて宝を与え、その約束を責めて女を取る、――それが夢なれば、船に乗っても沈みはしまい。もし事実として、浪に引入るるものがあれば、それは生（しょう）あるもの、形あるもの、云うまでもありません、心あり魂あり、声あるものに違いない。その上、威があり力があり、栄（さかえ）と光とあるものに違いないと思いました。ですから、人はそうして歎い

ても、私は小船で流されますのを、さまで、慌騒ぎも、泣悲しみも、落着過ぎもしなかったんです。もしか、船が沈まなければ無事なんです。生命はあるんですもの。覆す手があれば、それは活きている手なんです。その手に縋って、海の中に活きられると思ったのです。

公子　（聞きつつ莞爾とす）やあ、（女房に）……この女は豪いぞ！　はじめから歎いておらん、慰め賺す要はない。私はしおらしい。あわれな花を手活にしてながめようと思った。違う！　これは

楽（たのし）く歌う鳥だ、面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ。

手を挙ぐ。たちまち闥（ドア）開けて、三人の侍女、二罎（ふたびん）の酒と、白金の皿に一対の玉盞（たまのさかずき）を捧げて出づ。女房盞を取って、公子と美女の前に置く。侍女退場す。女房酒を両方に注（つ）ぐ。

女房　めし上りまし。

美女　（辞宜（じぎ）す）私は、ちっとも。

公子　（品よく盞を含みながら）貴女、少しも辛うない。

女房　貴女の薄紅（うすべに）なは桃の露、あちらは菊花の雫（しずく）です。お国では御存じありませんか。海には最上の飲料（のみしろ）です。お気が清（すず）しくなります、召あがれ。

美女　あの、桃の露、（見物席の方へ、半ば片袖を

蔽(おお)うて、うつむき飲む）は。（と小(ちい)さき呼吸(いき)す）
何という涼しい、爽(さわ)やいだ——蘇生(よみがえ)ったような
気がします。

公子　蘇生ったのではないでしょう。更に新しい
生命(いのち)を得たんだ。

美女　嬉しい、嬉しい、嬉しい、貴方。私がこう
して活(い)きていますのを、見せてやりとう存じま
す。

公子　別に見せる要はありますまい。

美女　でも、人は私が死んだと思っております。

公子　勝手に思わせておいて可いではないか。

美女　ですけれども、ですけれども。

公子　その情愛、とかで、貴女の親に見せたいのか。

美女　ええ、父をはじめ、浦のもの、それから皆(みんな)に知らせなければ残念です。

公子　（卓子(テエブル)に胸を凭出(よせいだ)す）帰りたいか、故郷へ。

美女　いいえ、この宮殿、この宝玉、この指環、この酒、この栄華、私は故郷へなぞ帰りたくはないのです。

公子　では、何が知らせたいのです。

美女　だって、貴方、人に知られないで活きているのは、活きているのじゃないんですもの。

公子　（色はじめて鬱（うつ）す）むむ。

美女　（微酔の瞼（まぶた）花やかに）誰も知らない命は、生命（いのち）ではありません。この宝玉も、この指環も、人が見ないでは、ちっとも価値（ねうち）がないのです。

公子　それは不可（いか）ん。（卓子（テエブル）を軽く打って立つ）貴女は栄燿（えよう）が見せびらかしたいんだな。そりゃ

不可ん。人は自己、自分で満足をせねばならん。人に価値をつけさせて、それに従うべきものじゃない。（近寄る）人は自分で活きれば可い、生命を保てば可い。しかも愛するものとともに活きれば、少しも不足はなかろうと思う。宝玉とてもその通り、手箱にこれを蔵すれば、宝玉そのものだけの価値を保つ。人に与うる時、十倍の光を放つ。ただ、人に見せびらかす時、その艶は黒くなり、その質は醜くなる。

美女　ええ、ですから……来るお庭にも敷詰めて

ありました、あの宝玉一つも、この上お許し下さいますなら、きっと慈善に施して参ります。

公子　ここに、用意の宝蔵がある。皆、貴女のものです。施すは可い。が、人知れずでなければ出来ない、貴女の名を顕し、姿を見せては施すことはならないんです。

美女　それでは何にもなりません。何の効もありません。

公子　（色やや嶮し）随分、勝手を云う。が、貴女の美しさに免じて許す。歌う鳥が囀るんだ、雲雀は星を凌ぐ。星は蹴落さない。声が可愛らしいからなんです。（女房に）おい、注げ。

女房酌す。

美女　（怯れたる内端な態度）もうもう、決して、虚飾、栄耀を見せようとは思いません。あの、ただ活きている事だけを知らせとう存じます。

公子　（冷かに）止したが可かろう。

美女　いいえ、唯今も申します通り、故郷へ帰って、そこに留まります気は露ほどもないのです。ちょっとお許しを受けまして生命のあります事だけを。

公子、無言にして頭掉る。美女、縋るがごとくす。

あの、お許しは下さいませんか。ちっとの外出（そとで）もなりませんか。

公子　（爽（さわやか）に）獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くもの悲しむものは無論の事、僅少（きんしょう）の憂（うれい）あり、不平あるものさえ一日も一個（ひとり）たりとも国に置かない。が、貴女には既に心を許して、秘蔵の酒を飲ませた。海の果（はて）、陸の終（おわり）、思って行（ゆ）かれない処はない。故郷（ふるさと）ごときはただ一飛（ひととび）、瞬（まばた）きをする間（ま）に行（ゆ）かれる。（愍（あわれ）むごとくしみじみと

顔を視（み）る）が、気の毒です。
貴女にその驕（おごり）と、虚飾（みえ）の心さえなかったら、一生聞かなくとも済む、また聞かせたくない事だった。
貴女、これ。
（美女顔を上ぐ。その肩に手を掛く）ここに来た、貴女はもう人間ではない。

美女　ええ。（驚く。）

公子　蛇身になった、美しい蛇(へび)になったんだ。

美女、瞳を睜(みは)る。

その貴女の身に輝く、宝玉も、指環も、紅(べに)、紫の鱗(うろこ)の光と、人間の目に輝くのみです。

美女　あれ。（椅子を落つ。侍女の膝にて、袖を見、背を見、手を見つつ、わななき震う。雪の指尖(ゆびさき)、

思わず鬢を取って衝と立ちつつ）いいえ、いいえ、いいえ。どこも蛇にはなりません。一、一枚も鱗はない。

公子　一枚も鱗はない、無論どこも蛇にはならない。貴女は美しい女です。けれども、人間の眼だ。人の見る目だ。故郷に姿を顕す時、貴女の父、貴女の友、貴女の村、浦、貴女の全国の、貴女を見る目は、誰も残らず大蛇と見る。ものを云う声はただ、炎の舌が閃く。吐く息は煙を渦巻く。悲歎の涙は、硫黄を流して草を爛らす。長い袖は、

腥（なまぐさ）い風を起して樹を枯らす。悶（もだ）ゆる膚（はだ）は鱗を鳴（なら）してのたうち蜿（うね）る。ふと、肉身のものの目に、その丈より長い黒髪の、三筋、五筋、筋を透（すか）して、大蛇の背に黒く引くのを見る、それがなごりと思うが可（い）い。

美女　（髪みだるるまでかぶりを掉（ふ）る）嘘です、嘘です。人を呪（のろ）って、人を詛（のろ）って、貴方こそ、その毒蛇です。親のために沈んだ身が蛇体になろう筈（はず）がない。遣（や）って下さい。故郷（くに）へ帰して下さい。親の、人の、友だちの目を借りて、尾のない鱗のな

い私の身が験したい。遣って下さい。故郷へ帰して下さい。

公子　大自在の国だ。勝手に行くが可い、そして試すが可かろう。

美女　どこに、故郷の浦は……どこに。

女房　あれあすこに。（廻廊の燈籠を指す。）

美女　おお、（身震す）船の沈んだ浦が見える。（翻然

と飛ぶ。……乱るる紅、炎のごとく、トンと床を下りるや、颯と廻廊を突切る。途端に、五個の燈籠斉しく消ゆ。廻廊暗し。美女、その暗中に消ゆ一舞台の上段のみ、やや明く残る。）

公子　おい、その姿見の蔽を取れ。陸を見よう。

女房　困った御婦人です。しかしお可哀相なものでございます。（立つ。舞台暗くなる。――やがて明くなる時、花やかに侍女皆あり。）

公子。椅子に凭る。――その足許に、美女倒れ伏す――疾く既に帰り来れる趣。髪すべて乱れ、袂裂け帯崩る。

公子　（玉盞を含みつつ悠然として）故郷はどうでした。……どうした、私が云った通だろう。貴女の父の少い妾は、貴女のその恐しい蛇の姿を見て気絶した。貴女の父は、下男とともに、鉄砲をもってその蛇を狙ったではありませんか。渠等は第一、私を見てさえ蛇体だと思う。人間

の目はそういうものだ。そんな処に用はあるまい。泣いていては不可ん。

美女悲泣す。

不可ん、おい、泣くのは不可ん。（眉を顰む。）

女房　（背を擦る）若様は、歎悲むのがお嫌です。御性急でいらっしゃいますから、御機嫌に障ると

悪い。ここは、楽しむ処、歌う処、舞う処、喜び、遊ぶ処ですよ。

美女　ええ、貴女方は楽（たのし）いでしょう、嬉しいでしょう、お舞いなさい、お唄いなさい、私、私は泣死（なきじに）に死ぬんです。

公子　死ぬまで泣かれて堪（たま）るものか。あんな故郷（くに）に何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。ここには悲哀のあることを許さんぞ。

美女　お許しなくば、どうなりと。ええ、故郷の事も、私の身体も、皆、貴方の魔法です。

公子　どこまで疑う。（忿怒の形相）お前を蛇体と思うのは、人間の目だと云うに。俺の……魔……法。許さんぞ。女、悲しむものは殺す。

美女　ええ、ええ、お殺しなさいまし。活きられる身体ではないのです。

公子　（憤然として立つ）黒潮等は居らんか。この

女を処置しろ。

言下に、床板を跳ね、その穴より黒潮騎士(こくちょうきし)、大錨(おおいかり)をかついで顕(あらわ)る。騎士二三、続いて飛出づ。美女を引立て、一の騎士が倒(さかしま)に押立てたる錨に縛(いまし)む。錨の刃越(はごし)に、黒髪の乱るるを掻掴(かいつか)んで、押仰向(おしあおむ)かす。長槍(ながやり)の刃、鋭くその頤(あぎと)に臨む。

女房　ああ、若様。

公子　止めるのか。

女房　お床が血に汚れはいたしませんか。

公子　美しい女だ。花を挘（むし）るも同じ事よ、花片（はなびら）と蕊（しべ）と、ばらばらに分れるばかりだ。あとは手箱に蔵（しま）っておこう。――殺せ。（騎士、槍を取直す。）

美女　貴方、こんな悪魚の牙（きば）は可厭（いや）です。御卑怯（おひきょう）な。見ていないで、御自分でお殺しなさいまし。

（公子、頷（うなず）き、無言にてつかつかと寄り、猶予（ためら）わず剣（つるぎ）を抜き、颯（さっ）と目に翳（かざ）し、衝（つ）と引いて斜（なな）めに構う。面（おもて）を見合す。）

ああ、貴方。私を斬（き）る、私を殺す、その、顔のお綺麗さ、気高さ、美しさ、目の清（すず）しさ、眉の勇ましさ。はじめて見ました、位の高さ、品の可（よ）さ。もう、故郷も何も忘れました。早く殺して。ああ、嬉しい。（莞爾（にっこり）する。）

公子　解け。

騎士等、美女を助けて、片隅に退(の)く。公子、剣(つるぎ)を
提(ひっさ)げたるまま、

こちらへおいで。（美女、手を曳(ひ)かる。ともに床に
上(のぼ)る。公子剣を軽く取る。）終生を盟(ちか)おう。手を
出せ。（手首を取って刃を腕(かいな)に引く、一線の紅血(こうけつ)、
玉盞(ぎょくさん)に滴る。公子返す切尖(きっさき)に自から腕を引く、
紫の血、玉盞に滴る。）飲め、呑もう。

盞（さかずき）をかわして、仰いで飲む。廻廊の燈籠一斉に点（とも）り輝く。

あれ見い、血を取かわして飲んだと思うと、お前の故郷（くに）の、浦の磯（いそ）に、岩に、紫と紅（あか）の花が咲いた。

それとも、星か。

（一同打見る。）

あれは何だ。

美女　見覚えました花ですが、私はもう忘れました。

公子　（書を見つつ）博士、博士。

博士　（登場）……お召。

公子　（指す）あの花は何ですか。（書を渡さんとす。）

博士　存じております。竜胆（りんどう）と撫子（とこなつ）でございます。新夫人（にいおくさま）の、お心が通いまして、折からの霜に、一際色が冴（さ）えました。若様と奥様の血の 俤（おもかげ） でございます。

公子　人間にそれが分るか。

博士　心ないものには知れますまい。詩人、画家が、しかし認めますでございましょう。

公子　お前、私の悪意ある呪詛（のろい）でないのが知れたろ

う。

美女　（うなだる）お見棄のう、幾久しく。

一同　――万歳を申上げます。――

公子　皆、休息をなさい。（一同退場。）

公子、美女と手を携えて一歩す。美しき花降る。二歩す、フト立停まる。三歩を動かす時、音楽聞ゆ。

美女　一歩に花が降り、二歩には微妙の薫、いま三あしめに、ひとりでに、楽しい音楽の聞えます。ここは極楽でございますか。

公子　ははは、そんな処と一所にされて堪るものか。おい、女の行く極楽に男は居らんぞ。（鎧の結目を解きかけて、音楽につれて徐ろに、やや、ななめに立ちつつ、その竜の爪を美女の背にかく。雪の振袖、紫の鱗の端に仄に見ゆ）男

の行く極楽に女は居ない。

――幕――

大正二（一九一三）年十二月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成7）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十六巻」岩波書店
1942（昭和17）年10月15日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：染川隆俊
2006年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空

文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。